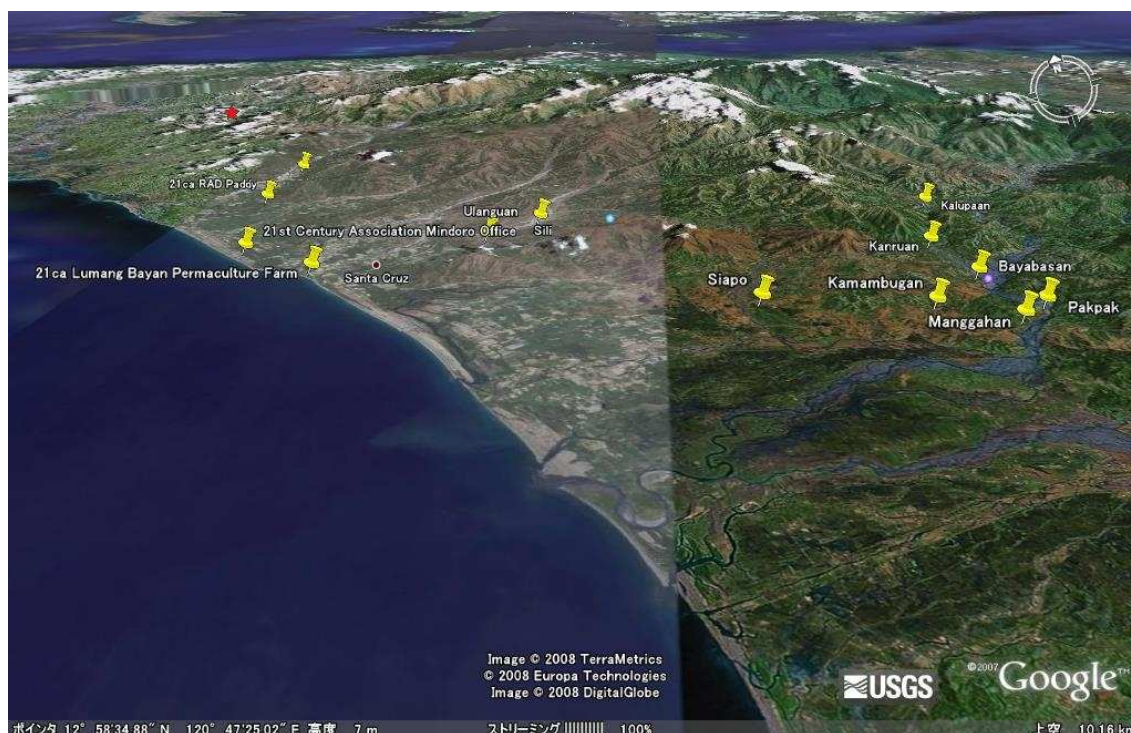


21世紀協会



事業地一望（西ミンドロ州サンタクルス町）

2007年度 事業完了報告書

目次

全体の評価	2
協会事業のプロトタイプ	2
日本国内の活動	2
今期の成果とトピック	3
各事業	3
1 就学支援事業	3
1-1 就学支援事業	3
1-2 識字教育事業	4
2 マンニャン村コミュニティー開発事業	5
2-1 アムナイ川流域人間保障会議 (Amnay Area Conference on Human Security) 構想	5
2-2 衛生環境整備事業	6
3 マンニャン人間開発センター	7
3-1 ボランティア・スタッフへのエンパワーメント	7
3-2 パーマカルチャーの推進	7
3-3 インターネットの開通	8
4 不用品セールス	9
5 人材育成	9
6 ネットワーキング・アドボカシー	9

全体の評価

協会事業のプロトタイプ



協会の現状を製造業界に喩えれば、ようやくプロトタイプが出来上がり、これから量産体制に入る、といったところだろうか。プロトタイプとは、協会事業の事実上の担い手である「ボランティア・スタッフ」や「識字教室を拠点にした事業の展開パターン」のことである。勿論、双方共に今後共改良、改善を限りなく繰り返さなければならないが兎にも角にも、「地域マンニャン族の非識字撲滅」、「地域マンニャン族社会の保健衛生状態の劇的改善」、といった事業目標に取り組む足が

かり、生産拠点、体制が出来た、ということができる。

開発事業の観点からすれば、これまでの 17 年間は本格的事業を開始するための準備期間、ということになりあまりにも効率が悪いように見えるが実際、現地でのマンニャン族対象開発事業の失敗の全てが「事業の担い手の不在」、ということや、また「住民主体型」、「持続性」ということを考えれば避け得ぬプロセスであったといえよう。

プロトタイプ、あるいは将来のマンニャン社会を担うリーダー的存在であるボランティア・スタッフの数は今年 19 名にまで膨れあがった。うち 3 名は大学及び専門学校卒業、大学中退者 7 名である。1999 年度にハイスクール卒業生 3 名でスタートしたボランティア制度による事業運営形態の質は確実に上がっている。今期はさらなる質の向上、また、協会ビジョンの共有を徹底するため、州保健当局の協力や日本からパーマカルチャー専門家を招聘するなどしてセミナーを開催した。

先住民族マンニャン集落の開発スキームも 3 年間の JICA 草の根無償事業「アムナイ川流域識字推進事業」を通してほぼ確立した。事業の担い手であるボランティア・スタッフによる識字ステーション（識字教育の拠点）を中心に医療支援、農業指導、コミュニティー作り、といった総合的人間開発のパターンが非常に有効であることがわかり、今後は水平展開を強化する方針である。

日本国内の活動

日本の本部で目立ったのは、活動の広がりである。学生を中心としたボランティアの活躍が活発化し、活動全体に新鮮な風が吹いた。その風に乗って、ホームページも一部刷新し、活動日誌ブログを公開、不用品掲示板、モバイルサイトも開設することができた。おかげで、一般会員と協会の距離が少し縮まったのではないかと期待する。また、理事長の池田晶子が外務省の ODA 政策協議会の NGO がわコーディネータを引き受け、政策提言を行うなど、アドボカシー活動も活発化してきた。



- ホームページ：<http://www.21ca.ac/>
- 活動日誌ブログ：<http://21ca-members.tea-nifty.com/blog/>
- 不用品掲示板：<http://21ca.bbs.cocacn.jp/>



今期の成果とトピック



アムナイ川流域識字教育推進事業の成果

- ✓ JICA 草の根無償事業の完了 (2005 年 1 月～2008 年 1 月)。識字ステーションがアムナイ地域に 4 カ所、識字教室参加児童数約 100 名、識字スタッフ計 8 名、地域からの公立学校就学者総数 25 名は全て開始当初に比べ約 3 倍の規模である。

ボランティア・スタッフへのエンパワーメント

- ✓ 州保健当局の協力による保健衛生セミナー (7, 8 月)、日本から専門家招聘によるパーマカルチャー・セミナー開催等によりボランティア・スタッフのスキル向上と協会ビジョンの共有を強化した

ますます混沌化するアムナイ川流域

- ✓ 協会事業により識字率の向上など成果が上がっているアムナイ地域であるが、地域の鉱山開発の賛否をめぐって今大きく揺れ動いている。地元の政治家の利権争いや共産ゲリラの思惑も絡み、ほとんどのマンニャン集落がますます分裂する傾向にあり治安が非常に不安定になっている。

各事業

1 就学支援事業



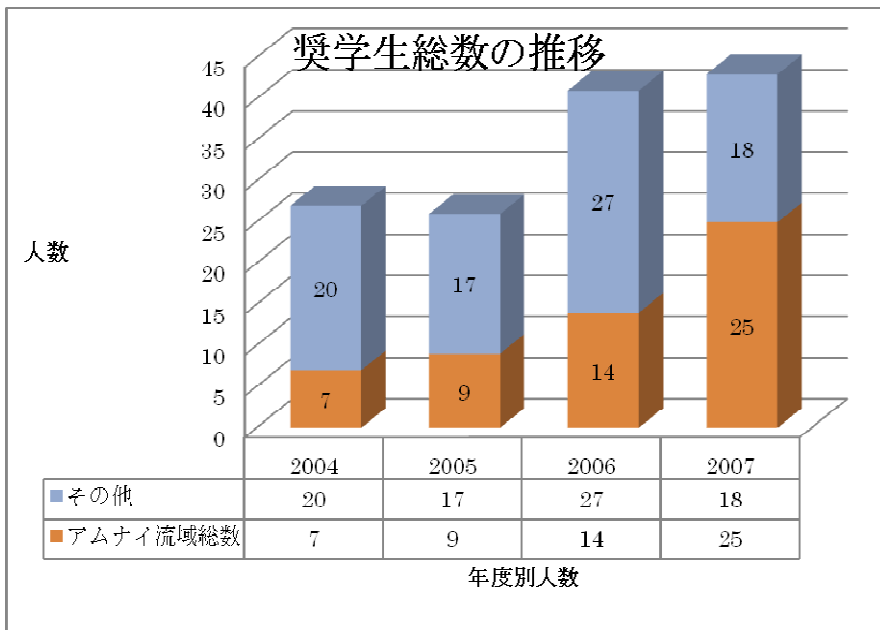
表 1 始業時 (6 月) と終業時 (3 月) における奨学生数の比較

	小学校		ハイスクール		大学		合計	
	始業時	終業時	始業時	終業時	始業時	終業時	始業時	終業時
アラガン族	23	20	3	1	1	1	27	22
イラヤ族	1	1	15	15	2	0	18	16
合計	24	21	18	16	3	1	45	38

* アラガン族にはアラガン族集落に住むタオブイット族を含む

1-1 就学支援事業

表3 アムナイ川流域出身の奨学生数の推移



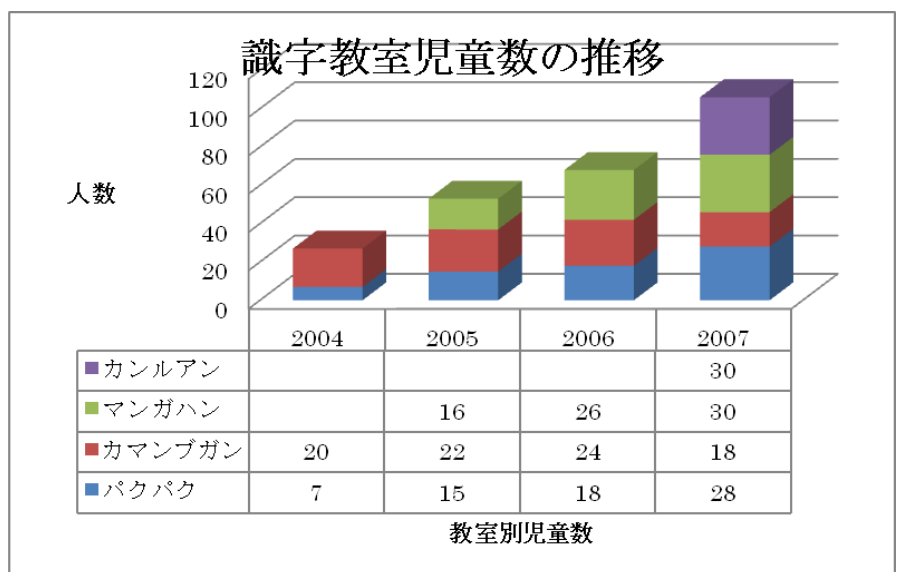
今年も大学生 2 名が入学から半年も待たずに落伍、落伍または落伍寸前のケースが後を絶たない。しかし全体としてみたとき、この数年の間に画期的な変化も見られる。一つには就学希望者が急増していること、そしてもう一つは就学生の定着率が安定してきたことである。今期入った新しい奨学生 17 名に対し実際の希望者は 2 倍以上であったし、また、カラミンタオ村（イラヤ族奨学生全ての出身村）出身のハイスクール生に関しては落伍者がゼロ、かつて終業時の数が始業時の半分であったことを思うと隔世の感がある。単純なことではあるが、地域社会で

の教育レベルを上げるには裾野を広げて行くこと、量を増やすことが大切である。大学卒業率を上げるにはハイスクール卒業率を上げる必要があり、ハイスクール卒業率を上げるには小学校のそれを、小学校の卒業率を上げるには地域の識字率がある程度に達していなければ望めない。この「数の論理」の原動力となっているのが識字教室を中心にした集落の総合開発パターンであるといえる。識字教育を中心に据えながら医療支援、農業指導、村作り事業など村を丸ごと抱え込むことにより住民の信頼を勝ち取り、住民と開発の効果（収入、収量の増加、疾病の完治、乳幼児死亡率の低下）を共有することが開発を最も有効に進める鍵であるといえる。

1-2 識字教育事業

2008 年 1 月に JICA 草の根無償事業で過去 3 年間進めてきた AALPP（アムナイ川流域識字教育推進事業）が完了した。表 2 に示す通り、事業開始当時と比べると識字教室への参加児童数が確実に増えており、また、アムナイ川地域出身の奨学生（サンタクルス町にある公立学校就学生）の数も表 3 の通り過去 3 年で 3 倍以上伸びた。数値で見ると、AALPP 事業の以前以後には大きな著しい変化が見られるがその原動力になって

表2 識字教室別参加児童数の推移



いるのが事業を担当するボランティア・スタッフである。マンニャン集落で識字教育を行う上で最もネック

になるのが人材であるが、先に触れたように今期はスタッフ数が 19 名と膨れ、うちアムナイ川流域に常駐スタッフ数も 9 名となった。事業の担い手が成長してきたことが 1 事業の成功ばかりでなく、今後の水平展開、ドラスティックな識字率の改善につながると期待される。

2 マンニャン村コミュニティー開発事業

2-1 アムナイ川流域人間保障会議 (Amnay Area Conference on Human Security) 構想



先住民族領の礎石を設置

過去 1 年以上に及ぶ地域住民との話し合いの結果、識字ステーションのある集落 4 つを中心に地域全体を網羅する協同組合を設立することに住民のほとんどが同意、また、仮の役員も選出されたが、実際には地域はますます分裂の傾向にある。

地域は政府によってマンニャン族グループの 1 つアラガン族に土地所有権の譲渡が約束されているものの、一方で鉱山開発予定地 (ニッケル、コバルト) として条件付けで大統領府の許可がでており、一部では採掘が始まっているという矛盾した状態にあり、最終的に開発決定権を持っている住民マンニャン族が賛否二つのグループに分かれるという事態が起きている。

さらにその賛否両陣営に地元政治家の利権や地域に潜伏する共産ゲリラが複雑に関与しており、住民へのハラスメントや買収行為が頻発している。いわば金と恐怖に地域全体が翻弄されており、地道に農業を進め、協同組合により助け合っていこうというムードが風前の灯りとなっている。

こうした事態への反省点、課題としては：

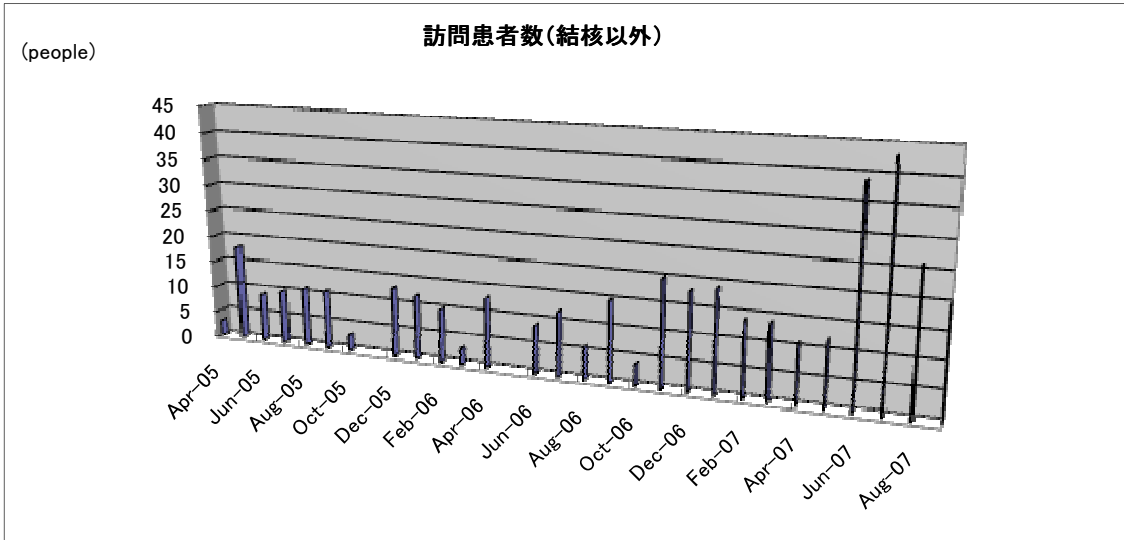
- ✓ 識字ステーションを中心に教育への関心が高まりつつあるとはいえ、住民のほとんどが非識字者であり協同組合といった高度な組織を運営する能力にはほど遠く、教育水準を短期間で効果的に挙げる必要があること
- ✓ 識字ステーションに常駐するスタッフ (ボランティア・スタッフ) のコミュニティー・オーガナイザーとしての力量不足
- ✓ コミュニティーを作るためのスキームの工夫 (作業と結果の因果関係を身近に実感できる方法の創出など)

などが挙げられる。いずれも一朝一夕には改善できないが、来期は識字教育にさまざまな事業を重ね協会の地域での存在感を強化しながら具体的活動内容を増やすことにより、地域コンセンサスを形成して行く方針である。

カンルアン村の子どもたち



2-2 衛生環境整備事業



グラフ1 訪問患者数の推移

援助体制の確立準備

すでに OJT によって患者の対応の仕方、記録の仕方などの経験のあるボランティア・スタッフ計 16 名が州



の保健当局とサンタクルス町保健所の協力を得て衛生セミナー（計 5 回）に参加、血圧計の取り扱い方、人工呼吸の仕方といった応急処置の仕方、病気のメカニズムについてなどの基本的知識を獲得した。セミナー後も町内にあるバラングイ保健所に出張して定期的健康診断や予防接種の補佐係として活動する中スキルを向上させた。また、大学で助産士のコースを卒業したエミリー・リナンヤンが 9 月から 3 月まで半年余り、州立病院のインターン生として OJT 訓練を受け十分な経験とスキルを獲得、来期以降協会の保健衛生事業の要として活躍する予定である。

医療支援の実績

また、協会が支援した患者数（医療支援を求めて協会事務所を訪れた患者数）は昨年度の 240 件から 339 件（グラフ 1 参照）と大幅に増加した。訪問患者数増加の最大の要因は、識字ステーションに常駐するスタッフによる患者への説得、また交通費をはじめとする経済的支援にあると思われるが、結核患者の取り扱い件数が増えるにつれ、患者が回復する姿を目の当たりにした住民が、医療機関や協会を信頼するようになったことも大きな原因である。

町の保健所の協力と理解を得、11 月から毎月一回計 5 回、マンニャン集落の 1 つマンガハンで予防接種を行い、延べ 7 カ所の集落から 100 名以上の子供達が麻疹、三種混合、ポリオなどのワクチンを接種した。回を追うごとに参加する地域が広がっており、当初今期いっぱい予定であったが、来期も引き続き月一回の予定で継続する予定である。

3 マンニャン人間開発センター

3-1 ボランティア・スタッフへのエンパワーメント



ボランティア・スタッフの数はすでに 19 名を数え、協会はすでにれっきとした組織である。質の向上にはある程度の量の蓄積が必要であることは教育レベルの向上の例で先にも触れたが、その意味ではそろそろ質の向上を期待し、また、図らなければならない時期にきたといえる。大学卒業者、また、その一歩手前の人材が増えてきていることはその象徴でもあり、組織としてもこれからリーダー育成にどんどん力を入れるべき時といえる。今期は先にも触れた医療セミナーの開催、また、日本からパーマカルチャーの専門家を招聘してのセミナーなど、ボランティア・スタッフがスキルや自信を養う機会を持ち得たことは大きな前進である。

表 4 各種セミナーの開催状況

セミナー/研修	期間	参加者
マンニャンヘルスサポーター養成セミナー	7月第4週より毎週1回計5日	ボランティア・スタッフ計16名
バランガイ・ヘルスセンターでのOJT	9月～11月週1回	ボランティア・スタッフ計13名
州立病院での助産師インターンシップ	9月～3月末	エミリー・リナンヤン
グローバル・ファンド主催マラリア	11月8日	エミリー・リナンヤン
妊産婦の健康	11月17日～19日	エミリー・リナンヤン、ミラ・パナグサガン
麻疹予防について	12月4日～6日	エミリー・リナンヤン
パーマカルチャー	1月22日～2月6日	ボランティア・スタッフ計16名

3-2 パーマカルチャーの推進

表 5 協会実験農場の収益状況

年度	パーマカルチャー農場			合鴨農場		
	支出	収入	利益	支出	収入	利益
2005	34,000	12,000	-22,000	60,000	40,000	-20,000
2006	13,028	24,582	11,554	54,507	49,350	-5,157
2007	7,915	45,713	37,798	37,704	38,310	606

* 単位ペソ、ただしスタッフの給与、人件費は省く



キーホールガーデンの実習

表 5 の数字を見る限り、今期の協会農場（ルマンバヤン地区パーマカルチャー農場、アラカアク地区合鴨農場）の収支は大きく改善している。本格的パーマカルチャーにはまったく及ばないとはいえボランティア・スタッフの意識が少しずつ高まっていることの現れといえよう。実際には今期はラー・ニーニャ現象による多雨、台風の被害の少なかったことも大きな要因である。また、今期はパーマカルチャー講師として日本から設楽清和パーマカルチャーセンタージャパン事務局長を招聘し実地訓練を含めたセミナーを開催、スタッフ全員が参加しその思想、背景を学び得たことは協会がめざす社会、ビジョンを共有する好機会となった。折しも 2008 年 3 月にはフィリピンは全国的な米不足、価格高騰を経験

しており、食料危機を体験することとなった。むしろこの国家的危機をきっかけに地域で「食の安全」に対する意識が高まることを期待したい。

3-3 インターネットの開通

今期は通信面で画期的出来事があった。現地事務所でのインターネット開通である。ブロードバンドといっても通信速度はいま一つで、また、停電による不通はしばしばであるものの日本との作業効率、分担が格段と改善されることが予想される。すでにネットカメラを利用したのネット会議も実現しておりこれまでの現地と日本の距離感も大きく変わりつつある。通信手段のみならず、現地スタッフが積極的に利用できる環境になれば、日本とフィリピン側での意識や考え方の違いを乗り越え、より効果的な事業作りに利用できるものと期待している。



図書棟の屋根の上に立てられたアンテナ

また、今期は通信以外でも外部との交流が頻繁になってきている。JICA の日本人職員のミンドロ訪問がはじめて実現したことは特記すべきことといえる。直接訪問やネットを通して活動にかかわるステーク・ホルダーが“現場”を共有する機会が増えることは、より効果的、適切な事業作りを実現するきっかけになると期待される。

表 6 現地通信手段の変遷

年	通信手段
1995 年	通信はマニラにてファックスあるいは国際電話のみ
1998 年	マニラなど都市部でインターネット・カフェが次々と開店
2000 年	サンタクルス町役場内に公衆電話設置
2001 年	州都マンブラオにて携帯電話サービス開始
2002 年	サンタクルスにて携帯電話サービス開始/州都マンブラオにネットカフェ開店
2007 年 11 月	サンタクルス町にてインターネット・サービス開始

4 不用品セールス

協会ではホームページなどで不用品をミンドロに送ってくださいと訴えてきた。日本では不用品があふれていて、それを捨てることに抵抗を感じる人が多いらしく、多くの古着不用品がミンドロに送られてきた。

国際小包の送料を送り主に負担していただくことから、多く送られることはないと予想していたが、思いの外多くの不用品がミンドロに送られてきた。不用品の販売による収入は今期も大幅に増加、ほぼ現地収入の5割という結果になった。日本のドナーの方の好意、善意には頭が上がらない状態であるが、現地では懸念材料も出てきている。販売価格は極めて廉価におさえてあるものの、購買能力のある特定の顧客が買い占める、それを見て嫉妬する、というケースも今期は頻繁にあった。販売を担当するスタッフに公平と透明性を徹底することによりマイナスのイメージは消えているが、今後セールスの意図を一般市民に理解してもらえるよういっそうの工夫が必要である。



5 人材育成



パーマカルチャーの創始者ビル・モリソン、その一番弟子のジェフロートンに挟まれた森川悠太

2005年から2007年までの2年間ミンドロにてインターン生として活動した森川悠太を外務省のNGO長期スタディ・プログラムのスタディ員としてオーストラリアに約半年派遣した。目的はパーマカルチャー・インスティテュートにてパーマカルチャーを学び、21世紀協会の活動や国際協力分野に貢献することである。森川悠太はパーマカルチャーのディプロマを得て帰国し、報告会を開催した。今後、NGOスタッフを対象とした研修や留学の機会はますます増えてくると思われ、今後ともインターン生の帰国後の進路として考えて行きたい。

また、森川帰国後空席だった現地インターン生も2008年4月より田畑智美がミンドロに派遣され留ることになった。

6 ネットワーキング・アドボカシー

21世紀協会がかねてよりJANARD(農業農村開発NGO協議会)の運営委員として他の農村開発系の団体と協力関係を作ってきたが、2007年10月にJANARDとして初めてグローバルフェスタに出展した。人材不足などから21世紀協会独自に出展は数年実現していなかったが、21世紀協会からボランティアを3人出して、JANARDとして出展することができ、JANARDの宣伝につとめるとともに、21世紀協会の活動も紹介し、これを機にボランティア希望者も発掘することができた。また、JANARDの





ODA 政策協議会

研修会の幹事も務め、パーマカルチャーや開発手法の一つである AI(アプレシエイティブ・インクアイアリー)など研修会を実施し、スタッフの能力向上につなげることができた。

さらに、JANARD の推薦を受けて 2007 年 6 月より理事長の池田晶子が外務省と NGO の定期協議会の ODA 政策協議会のコーディネータを務めることとなった。外務省に対して事業評価への NGO の参画を呼びかけるなど活発にアドボカシー活動を展開した。